
The possible world

田無 兼

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The possible world

【Nコード】

N9151Z

【作者名】

田無 兼

【あらすじ】

近未来、とある理由によりVR技術の発展した世界。

人は自らの技能すら売り物とし、世界中で日夜売買が行われていた。そこに現れた最新のVRMMOゲーム、「The possible world」

脳内インストール型スキル制を売りとしたこのゲームはまたたく間に世界中で大人気を博していた。

それから2年後、一人の大学生が新たにゲームの世界に入る時物語は始まる。

これは、近未来のネットゲを遊ぶ人々を描いた日常形小説である。

0 話

近未来

認知心理学、人間工学等の様々な分野からのアプローチにより、VR 技術を用いた技能学習方法が実用化された世界。

仮想空間であるVR世界に於いて技能学習を行つと、高効率でその技能を習得出来る。

このような内容の論文が発表されると、世界は一斉にVR技術に目を向け始めた。

そして、様々な問題がありつつも人類はその課題をクリアし、仮想現実による技能学習が一般化され始めた頃、更に新たな論文が発表された。

技能データの脳内インストールによる技能学習法、という論文である。

VR技術が発展していく中で、人は脳のメカニズムを次々と解析していった。

この論文は人の技能学習法の到達地点、技能を直接脳内にインストールし技能を学習させる方法について論じていた。

人々は色めき立った。

自分たちはやりたい事があればその方法を即座に手に入れ、することが出来るのだ、と。

しかし、これには1つの問題があった。

肝心の技能データの取得方法である。

技能データを得る方法は1つだけ。

人間の脳からその技能データを抽出するというものであった。

これの何が問題なのか？

脳内からデータを抽出する際に危険が伴うのだろうか？

そうではない、問題はデータを抽出すると抽出された者からその技能が喪失されてしまうこと。

そして、その抽出されたデータがコピーするたびに劣化していく事である。

だが、それでも好きな技術を極めて容易に習得する事を可能とするこの方法は世界で即座に研究され始めた。

数年後、この技術は確立され世界に広まった。

そして、技能データの市場化が始まったのである。

人々は金で技能を買い、また技能を売って金に換え始めた。

しかし、技能データには限りがあり、データには莫大な値段がついた。

そこで、世界の目は仮想現実での技能学習に向かった。

仮想現実には様々な技能の習得場を用意し、技能を習得し売買を行う。新しいビジネスの形がそこにあった。

そしてその形は次々に広まっていき、それは当然娯楽にも向かった。

VRMMO。

VR技術が発展し確立されたゲーム体系。

そこに登場した最新にして最高の人気を誇るゲーム。

その名はThe possible world。

脳内インストール型スキル制を導入したVRMMO。

これは、そんな近未来における少し変わったネットゲを遊ぶ人々の物語である。

1話

「暇だ」

目を覚まし、30分程ぼうつとしたあとそうつぶやいた。
更に5分程そのまま動かずにいると腹の虫がなった。
その音を聞いたとたんに腹が減った気がしてくる俺の頭は、かなり都合良くできているようだ。

身を起こし、ベッドの足側に配置された冷蔵庫のドアを開け中身を見ると調味料ぐらいしかない。

「そうか…昨日の夜にやけ食いして全部喰っちゃまったんだったな」

昨日はバイト先に顔を出して辞めると言ってきたのだった。
長く勤めていただけに辞めるのには抵抗があったのだけど、さすがにあんなヘマをしてしまうとバイト先には居られない。

「結構給料良かったんだけどなあ」

愚痴りながら部屋備え付けのキッチンまで歩き、炊飯器の中身を確認するとまだ白飯が残っていた。

「よし！」

少しテンションが上がり、冷蔵庫からバターを取り出しスプーンですくいフライパンに乗せ、火をかける。

バターをフライパンいっぱいに溶かしながら広げ、ご飯を投入。

ご飯の上に塩こしょうをふりかけ、しばらく炒めた後に醤油を入れる。最後にもう一度炒めると特製醤油バターライスの完成だ。

「男が作る適当料理だよな」

苦笑いしながらも香ばしい匂いに食欲がそそり、いそいそと皿に盛りつけテーブルへと持っていく。

「いただきます」

両手を合わせつぶやくと、早速右手にスプーンを持ち食べ始める。食べながら、左手を軽く振ると左手首のDデバイスが光り、左手の先に長方形の立体スクリーンが現れる。そこに左手の人差し指を這わせ、画面をスクロールさせニュースのアプリを開く。

「今日も特に気になるニュースは無い、か」

その後はネットブラウザを開き、いつも見ているサイトを巡回していく。

「しかし…便利なものだよな」

食事を終え、音楽アプリを起動させながら本格的にネットサーフィンを始めた時、ふと思いつ。

今の世の中はDデバイスがあればたいいの事ができてしまう。勿論料理などは無理だが、かつてはPC、携帯電話、ゲーム機等電子機器の類は全てが集約されてしまった。

といっても俺自身はそれらが別々だった時代をあまり覚えていないのだが。

画面から目を離し、自らの手首にある物を見る。

Dデバイス 正式名称は違うはずだが、世間的にはそう呼ばれている機械だ。

電子機器の類のほぼ全てが集約され、更にはVRダイプを行うために無くてはならない物。

VR技術が発展し、各種VR製品を使用するためには必要不可欠であり、全世界ではほぼ全ての個人が所持しているといわれているが「実際どんなもんだか。この時代にだって電気を使わない生活してる人も居るって聞くしな」

まあしかし、少なくともこの日本では全国民が所有していると言っても嘘にはならない。

なにせ、今やこれで口座の確認や買い物の支払いなどを行えるし、個人判別も行えるので最高峰の身分証明にもなる。免許等もデータで呼び出せるので免許不携帯になる心配も無しと素晴らしい物だ。

常に身につける事が習慣化しているため盗まれる事もないし、DNAによる識別があるので他人の物を使う事もできない。最早良いところしかないように思えるが、面倒くさい事もある。

Dデバイスが頭部、両の手首、腰、両の足首の全てにつけなければいけない物だからだ。

「けどまあ仕方ないよなあ」

これも全てはVRダイプを行う際に身体データを取得するために必要なのだという。

そう言う事もあり、Dデバイスは今では世界中で生産されている。企業により色々と違いがあり、Dデバイスの選び方でセンスを問われる事もある。

俺の場合は実用性を取り、日本製の通信速度とデータ容量に特化

したモデルを選んでいる。デザインは黒字にメタリックブルーの線が入った物だ。ちなみに一月のデータ通信料金は5000円である。

「あ…そうか、こいつの金も考えないと駄目だな」

本体はともかく月々の通信料金、そしてこの部屋の家賃に生活費。今までは全て自分で払ってきた。

その為に結構な時間をバイトに費やし、貯蓄も殖やしてきたのだが…そのバイトは昨日辞めてしまったのだ。

「貯金は…50万か」

銀行口座をチェックし、考え込む。

これだけあれば2ヶ月は大丈夫なはずだ。となれば、その間に新しいバイトを見つければいい。幸い今は夏休みが始まったばかりであり、時間はいくらでもある。

「しかし、それで良いのか？」

大学に入って2年目の夏。1年目はバイト三昧だった。来年からは色々と忙しくなるだろう。何かやるとしたら今しかないんじゃないか？

「ふん、ばかばかしい」

一瞬頭に浮かんだものを気の迷いと一蹴する。

今の時代、技能インスツール学習法が広まったこの時代ではとにかく金を貯めるべきなのだ。金さえあれば何だってできるようになるこの時代では。

しかし、しばらくバイトをする気になれないのも確かではあった。

失敗という物は思う以上に身に伝わる。

気晴らしにネットサーフィンを続けていると、興味を引かれる広告を見つけた。

「目指せ一攫千金、開拓者求む…何だこれ？」

随分と大々的な広告だった。

美男美女が左右に立ち、船に向かって手を向けている絵に大きな文字で誘い文句と共に書いてあるものがあつた。

「The possible world…そうか、こいつが噂のネットゲか！」

『The possible world』

VRMMOといわれるゲームの1つだ。

VRMMOというのは、VR技術の発展により可能となったVR製品の1つで、まあ簡単に言えば仮想現実で行われるネットゲである。確かThe possible worldは2年前から始まつたはずだが、俺はあいにく受験とバイトで縁がなかった。

ただ、今あるネットゲの中で1番人気があるという事だけは聞いていた。ネットゲに触れない俺がその噂を目にする程なのだから、よほど人気なのだろう。

「なにに、2年連続ユーザー満足度全世界1位、総プレイヤー人口全世界1位、他色々あるな…ん？」

ざっと説明を流し見していると、見慣れない単語が飛び込んできた。

「全世界初、脳内インストール型スキル制を採用。身につけたスキ

ルを売って君も一攫千金を目指せ、か」

脳内インストール型スキル制とは初めて聞く単語だ。だが何となく分かる。これはきつと現実と同じなのだ。

身につけた技能を売り買いする。今の世の中ではそれが可能だ。

理屈は知らない。大事なそれはそれが可能という現実だ。

医者になる方法は最早医学部に入るだけではなくなった。

医者としての技能データを買い、脳内にインストールすることで、人は試験のみで医者になる事が可能になったのだ。

だが、技能データは有限だ。それゆえ市場では秒単位で値が変わる。

需要と供給を見極めれば、自らの持つ技能を売りさばく事で億万長者になることも夢ではない。

つまりはこのネットゲもそうなのだ。ゲーム内で技能を磨き、それを売る事ができる。

そして上手く売りさばけば

「一攫千金つてわけだ」

ゲームの舞台はファンタジー世界での未開大陸。プレイヤーの目的はその開拓。

ゲームシステムの詳しい内容はゲーム開始時にインストールしてくれる、と。

悪くない。気晴らしになり、更に上手くいけば儲ける事もできるときたもんだ。

何故かは分からないが、かなり乗り気になってきていた。

気が変わらないうちにユーザー登録だけでもしておくしよう。まずは名前だな。

飛渡 翔一と。

2話

「これで終わりかな」

登録完了のメールが届き、一息をつく。

登録が随分細かったため、少し疲れが出た。

「まあ仕方ない事かもな」

なにせこのゲームはゲーム内で技能 ゲーム内ではスキルと呼ぶらしいが をやりとりするのだ、嚴重にしすぎて悪い事はないのだろう。

とは言っても、技能の抽出やインストールをするためには必ずDデバイスを介す事になるし、そこら辺は他人の好きにできないようにDデバイスにセーフティがあるはずなので問題は無いはずだが。

「実際、今までそう言う事故は起こってないようだしな」

技能抽出は本人の意志で行えない。Dデバイスに個人認証機能が入っているのもこのためといえるだろう。

もし、他人の手で技能抽出が行えてしまうと危険だからだ。

何故危険なのか。それは抽出した技能は、抽出された人の脳内から消滅するからだ。

仮に「呼吸の仕方」という技能を抽出した場合、抽出された人は即座に「呼吸の仕方」を忘れてしまう。これはどうする事もできない。

だからこそ、技能抽出は本人の意志でのみ行われるし、抽出されたデータとなった技能はあまり多くない。

抽出されたデータの中でも優秀な質を持ったデータは更に少ない。それゆえに、技能データの売買で一攫千金が狙えるのだが。

「まあ子供に買い与えるデータならたいしたことないんだろうけど……」

少し嫌な事を思い出した。

頭を軽く振り、頭に浮かんだ記憶を消す。

「とりあえず、天下のWCDが運営してるんだ。おまけに月額1万、やばい事にはならないだろう」

WCD、俺も詳しくないが多国籍企業でVR技術系の企業の中ではトップクラスの大企業だ。確か社訓が『私達はある！』とかでとにかく何でもやる企業だったはずだ。

「どうせやる事もないんだ、さっそくやってみるとするかな」

ベッドに横になり、さつきDデバイスにダウンロードしたThe possible worldを起動する。

<このゲームはVR製品です。使用するためにはVR空間に行く必要があります。>

<VRダイブしますか？>

<Yes/No>

Yesをタップすると目を閉じる。

すぐに独特の音が聞こえてくる。風鈴のような音だ。それが一定の間隔で聞こえてくる。

これは俺のDデバイスがVRダイブを行う時に鳴る音だ。結構気

に入っている。

そして、段々意識がなくなっていく。風鈴の音が遠ざかっていく。

ふと気づくと、俺はどこかの部屋にいた。

3畳程の広さの部屋で椅子に腰掛けている。

「ここは？」

VR世界に行くのは初めてではない。今の世の中、むしろ行つた事の無い人の方が少ないだろう。

VR世界といっても現実と殆ど変わりはない。Dデバイスによる個体認証で身体情報も現実とほぼ変わりがない。違うのはせいぜい身体ダメージを受けても死なないといったぐらいか。

実際に臓器等があるわけではないので死ぬ事はない。だが痛みは感じる。それが何故かと言えば。

「確か、リアリティを保つ必要があるからだったか？」

元々VR技術が発達したのはVR世界で人の技能を上達させるためだとか学校の授業で習った気がする。

その為には限りなく現実と近い状態にする必要があるとか。

「まあショック死はしない程度にリミッターがかかってるから大丈夫なんだよな」

良いながら席を立てみる。視線の高さはいつもと同じ170センチちよい上。

問題なく身長は同じのようだ。左の壁に掛かっている鏡を見れば、何処にでも居るような顔立ちの男の姿がある。年齢に比べて老けると言われる顔、俺の顔だ。

「そろそろよろしいでしょうか？」
「！？」

あわてて辺りを見渡すと、正面に女性が立っていた。

美人と呼んで良いだろう。顔立ちはアジア系の中でも日本人に近く、髪と目は黒いが肌は日本人にしてはかなり白い。目はくりっとして大きく、髪は肩までのショートボブ。身長は俺の肩ぐらい。

服装は、何とかまさしくファンタジーだ。

全身を金属でできた鎧で着飾っており、腰からは純白の鞘に包まれた剣を下げている。

鎧でよく分らないが、腰つきが色っぽい割に胸はあまり大きくないようだ。

「あの、大丈夫でしょうか？」
「あ、はい、大丈夫です！」

思わず呆然としてしまった。

いきなり美人に声をかけられれば誰だってそうなる…はずだ。

「すみません、いきなりだったからビックリしてしまって…えっと、あなたは？」

「はい、私はTPW、The possible worldの日本地区担当GMの一人、山桜と申します」

彼女はにっこりと笑って告げた。

しかし…GMだって？

「えっと、GMってことは運営の人って事で良いんですよね？なんでそんな人がわざわざ？」

「それはですね、あなたがここに来てからずっと独り言ばかりでキャラクターを始めないからです」

頬を若干ふくらませ、いかにも怒ってますという風にこちらを見る彼女。

それにしてもキャラクター、確かにゲームを始める以上キャラクターは必須だと思うが、始めないとはどういう事か。

「始めないと言われても、やり方が分からないんですが」

無然としながら言うと、彼女は信じられない物を見るようにこちらを見て。

「あの、規約とかはちゃんと読んでますよね？」

「勿論、大事な部分はちゃんと読んでます」

「ではホームページでキャラクターの仕方などは読みましたか？」

「いや、それは読んでませんが、しかしですね。こう言うのは普通説明がある物では？」

彼女はため息をつき、こちらの手首を指さした。

「ほら、手首のDデバイスが反応していますよね？それを起動してキャラクターを始めるんです」

あわてて左手首のDデバイスを見ると確かに光が点っている。

普通反応がある時は振動もするはずなのだが、気付かなかったようだ。

「どんだけうつかりさんなんですか、それにキャラクターの仕方ぐらいいは読んでくるものですよ？」

「お手数おかけしてすいません…」

手首を振り、Dデバイスを起動させると画面が現れ、その中に俺の全身像が映っていた。

<これからキャラメイクを始めます>
<まず種族を決めて下さい>

「種族？」

「…まさか、そこから分からないんですか？」

軽く首をかしげると、山桜さんがおそろおそろ声をかけてきた。

「はい、どうもそうみたいで…」

「そうみたいって…はあ、分かりました。軽く説明させて貰います」

彼女は軽く首を振ると、右手を大きく振った。

彼女のうつすらとピンク色をしたDデバイスが起動し、大きな立体スクリーンが現れる。それを彼女は指で操作し、しばらくして画面をこちらと共有設定にして見せてくれる。

そこには5つの人らしき姿が映っていた。普通の人、何か頭に耳が生えててしっぽもついてる人、耳が長い人、えらくでかい人、えらくちつこい人の5人だ。

「TPWの世界にはかなりの数の種族が存在します。しかしプレイヤーが使用出来る種族は人間、獣人、妖精人、巨人、小人の5種類。更に巨人と小人には身長制限が存在します」

「身長制限ですか？」

「はい、VR世界では当たり前なのですが、プレイヤーとキャラクターの身体能力は同じになります。これは現実と仮想現実で違和感

の無くすためですね。その為、巨人種族は身長250cm以上、小人種族は身長145cm以下と定められています」

「それはまた…随分と厳しい制限ですね。特に小人なんか、昨日145cmでも今日は146cmに成長してた、なんてこともあり得るんじゃないですか？」

「はい、その場合はゲームをする事はできません。その為小人種族になられる方は非常にまれです」

なるほど、5種類とは多いと思ったが、自動的に2つは消えた。残り3つなわけだが。

「えっと、人間はともかく獣人と妖精人について教えて欲しいんですが」

「獣人は見ての通り、動物の特徴が付与される種族です。何の動物になるかはランダムですね。妖精人は耳が長く、線が細くなります。」

「

「はあ、見た目の違いは分かりましたが、身体能力としての違いはどんな物なのでしょう？」

「ありませんよ」

あっけらかんと言う彼女に視線を合わし。

「無いんですか？」

「無いですね」

「じゃあ何のために仕様種族が用意されてるんですか!？」

意味が分からない。能力に差がないなら種族を選ぶ必要なんて無いじゃないか。

「んー、そうですね。一番の理由はやはり選べる種族が1つじゃつ

まらないでしょう?」

「そりやまあそうですね…選んでも違いがないんじゃない?」

「まあまあ、そうあわてないで下さい。ちゃんと種族間に違いはありますから」

あるのかよ!

思わず頭の中で突っ込んでしまった。

しかし、身体能力に違いがないなら一体何に違いができるっていうんだ?

いいですか?と彼女は人差し指を立ててノリノリに解説してくる。

「そもそも種族間に差がないのはこのゲームの肝である脳内インストール型スキル制を生かすためではあるんですが、それを説明すると長くなるので止めます。とりあえず覚えておいて欲しいのは1つ。種族によつて装備出来る物とできない物がある、という事です」
「装備: ですか」

「そうです!このゲームでは装備はとても重要なファクターを持っていると言つて過言ではありません。ですので、種族を選びはそこ重要なんですよ?」

ふむ、確かにそうなると種族選びはかなり大事だな。

「じゃあ種族によつてどういう物が装備出来たりできなかったりするんです?」

「そうですね、獣人なら金属製の防具などは装備出来ませんし、妖精人は更に革製も駄目ですね。妖精人はおまけに近接系の武器にも装備の制限があります」

「制限ばつかじゃないですか」

「いやいや、その代わりに妖精人は魔法系の装備に制限がありませんからね。魔法使いになるなら妖精人はかなりオススメですよ!」

「魔法使い…ですか？」

きょとんとして山桜を見つめると、彼女の方もこちらを見つめてきて。

「ええ、魔法使いですが…どうかしましたか？」

「いや、魔法使いなんてなれるものなのかと思ひまして」

VR世界は技能学習のために発展した。それゆえにVR世界では現実でできない事はできない。これがVR世界の常識である。

実際、魔法を使えとか言われても全く想像出来ない。

「ああ、そうですね…厳密には魔法使いとちよつと違うわけですが」といふと？」

「さつきも言ったように、VR世界であつてもプレイヤーとキャラクターの身体能力に差はありません。だから、物語にあるようなMPなんてものもあるわけがないんです。そのため、この世界は魔法が使える装備という物があります」

「魔法が使える装備？」

ちよつと分かりにくいですね、と彼女は笑いながら説明を続ける。

「現実世界の銃みたいな物ですよ。例えば炎の杖というアイテムが合つたとします、その杖特有の発動動作を行えば炎を敵に向かって放つ事ができるというわけです」

「ああ、なるほど、確かに純粋な魔法使いでは無いですね」

「はい、この様にTPWではアイテムに様々な能力が付与されます。それを使う事で現実には不可能な事も可能となるんです！」「だから可能の世界、なのか…分かりました」

色々と納得がいった。

しかしそうなるとますます種族選びが重要になってきたな。顎に手を当て、どれにするか悩む。しかしこれといったものがないな。逆に言えばどれも面白そうな気はするしな。

「特にこれがやりたい、といったものがなければ人間を選ぶのが良いと思いますよ」

迷っている俺を見かねてか、彼女が声をかけてきた。

「それは何故でしょう？」

「人間種族は他の種族に比べて装備の制限が圧倒的に少ないんです。だから人間種族なら色々な事をとりあえず試せると思いますよ」

「はあ…しかしそれじゃみんな人間種族を選ぶんじゃないですか？」

いくら見た目がいつもと変わらずつまらないといっても、人間だけそんなに優遇されていれば皆人間を選ぶだろう。

そんなこちらの思いを知ってか、それはですね、と山桜が説明を始める。

「人間は確かに装備制限が少ないんですが、逆に専用装備も圧倒的に少ないんです」

「専用装備？」

また新しい単語が出てきたぞ。

「専用装備というのは、そのまま種族専用の装備の事です。人間専用とか獣人専用とかですよ」

「そんな物まであるんですか」

「まあ、まだゲーム内でも数えるくらいしか見つからない物で

すが、比率から言って人間種族専用の装備が少ない事は確かですね」
なるほど、人間は確かに汎用性はあるかもしれないが、最終的に上に向かうなら違う種族の方が良いのだろう。

さて、今まで出た情報を踏まえて俺が選ぶ種族は：

「よし！」

そこから更にしばらく考え、結論を出した俺は自らのDデバイス画面を操作した。

軽い音と共に画面に文字が現れる。

<種族選択>

<人間種族が選択されました>

<次の選択肢へと移行します>

3話

「人間で良かったんですか？」

こちらを見ていた山桜さんが声をかけてくる。

「ええ、そもそもゲームの内容もあまり調べてませんし、それならできる事が多い方が良くと思いますして」

それに元々長く続けるつもりではないのだ。あくまで夏休み中の暇つぶし。ついでに儲けられたらラッキーといったところだろう。そんな事よりも気になる事がある。

「あの、付き合っていてありがたいんですが、良いんですか？」

「ああ、大丈夫ですよ。今丁度昼休みなので」

「その、余計に申し訳ないんですが…」

まさか昼休みだったとは。

時計を見れば確かにそんな時間だ。しかしこれ以上付き合わせるのはさすがに申し訳ない。

「あの、これから先は一人でやりますので、大丈夫ですよ」

こちらの言葉を聞いた彼女は、少し考えるそぶりをした後こちらにほえんだ。

「折角なのでキャラメイクだけでもおつきあいしますよ。これも御仕事ですから、気にしないで下さい」

美人が笑うと破壊力がでかいが、仕事だからと聞いて少し冷静になれた。

そう、向こうも仕事だ。月額1万円はでかい。どうせなら向こうだって長く続けて貰いたいものだろう。

「ではお言葉に甘えて…次は外見ですか」

<外見を決定します>

<髪型を指定して下さい>

Dデバイス画面には、新しい文字と共に無数のサンプル画像が浮かんでいた。

「さつきプレイヤーとキャラクターに身体能力の差はないって言うてましたけど、外見とかは変えても良いんですか？」

「はい、勿論そのままでも大丈夫ですけど、やはり仮想現実ですから、普段とは違う自分になりたい方が多いですね。身長と体重は変えられませんが、髪型や顔、髪や目、肌の色とかも変えられますし、外見だけでもがっしりさせたりとかもできますよ」

なるほど、外見を変えるだけなら自由自在というわけだ。

しかし、そこまで変える事ができるんだな。VR世界では違う自分になる事ができるとは聞いていたが、今までそう言うサービスは受けた事がなかったし。

「あれです、別のサービスで使ってるアバターがあれば、それを使う事もできますよ？」

「残念ながら持っていないですね。しかしこれ1から考えるのはめんどくさいですよ…」

「一応そういう人のためにサンプルアバターがありますけど」

そういつて彼女が指し示した部分には完成されたキャラクターが何人も並んでいるが。

「どれも俳優みたいな奴ばかりだな…」

一般的に格好いいといわれるような容姿ばかりだ。
この中から選ぶのもなんだかためられるな。

そこからいくつか適当に作ってみたものの、これというものができない。

山桜さんも側でニコニコと笑ってくれているが、若干呆れ気味の様子だ。

10回目のキャラをデリートしたところで決心をする。もうめんどくさいしいいや。

画面をスクロールし、変更無しのボタンを押す。

<外見の変更無しを撰択>

<最終確認へと移行します>

「良いんですか？もしかして私急かしてしまったでしょうか？」

驚きながら山椿さんがこちらへ話しかけてくる。

申し訳なさそうな顔を見てるとこっちの方が申し訳なくなってしまう。

実際にこっちが面倒くさくなっただけだ。

「いや、そんな事ありませんよ。現実そのままの人って珍しいんじゃないかなと思ってやっただけですから」

そういえば、話をそらすついでに気になってた事でも聞いてみるか。

「あの、このキャラメイクって別に現実世界でもできますよね？何でわざわざこっちでやるんですか？」

現実世界でやっていれば恥を搔く事も、山桜さんに迷惑をかける事も無かつたろうに。

まあこんな美人と話せたのはラッキーだったけど。

ああ、それはですね、と彼女は笑顔になって話し始める。

「もう少ししたら分かりますよ」

曰くありげに微笑んでくる彼女。しかしこの人は笑顔が似合うな…と！？

突如身体が輝きだし、視界が白く染まる。

「何だつてんだ！？」

地味に焦ってしまったが、光は一瞬で収まった。一体何が？

「あちらをどうぞ」

彼女の手が向かう先には、さっき見た鏡が…っておお。

「姿が…変わってる！」

といってもキャラメイクで外見を変えなかったなので、殆ど変わりはない。

服が17世紀のヨーロッパみたいな布の服に、革の靴へと変わっていて、ぶっちゃけかなり似合っていない。

あとはDデバイスが消えている。いや手首に1つだけになっている。

「なるほど、まあVR世界でVRダイブする事はないし、手首のデバイスのみで十分だよな」

「なんだかあまり驚いてませんね…」

まあ、こんだけ変化がなければ驚きはしない。

しかし、彼女がさっき言っていた事が分かった。

「つまり、これが最終確認で、実際に外見を変えていやだったらやり直せる、と」

「ええ、試着ならぬ試アバターってやつですね！」

上手い事言ったといわんばかりに自慢げな顔を見せてくる。

…何を言えいいのか分からない。

彼女もそれに気付いたのか、一度咳払いをするとこちらを見る。

「それで、どうですか？今ならまだ変更可能ですよ」

もう一度、鏡で自分の姿を見る。

やはり服が壊滅的に似合っていない気がするが…

「あの、ゲーム内には和服とかあるんですか？」

「え？どうですかね…あるんじゃないでしょうか。無くても誰かが作ってそうですし」

作るってのがどういう事かは分からないが、おそらくゲーム内で

自由に服が作れるのかもしれない。

まあ似合って無い気がするといっても飽くまで気がするだけ…大丈夫だろう、きっと。

心を決めてデバイス画面を操作する。

<最終確認>

<キャラクター外見はこれでよろしいですか？>

<Yes/No>

Yesを押すと、また画面が切り替わる。

<キャラクター外見の作成を完了しました>

<最後にキャラクター名を入力して下さい>

むむ、名前か…どうするかな。

「ハンドルネームとか持っていないんですか？」

山桜さんが悩み始めたこちらを見て、訪ねてくる。

ハンドルネーム、持ってないな。

うつむ…今までで一番悩んでる気がするぞ？

「思いつかない時は自分の名前をもじってみたらどうですか？」

「名前をもじる…ですか」

「ええ、自分の名前を使うとキャラに愛着が持てますから、かなりオススメですよ！」

そうつ物だろうか？むしろ恥ずかしい気もするのだが。

「じゃあ山桜さんも？」

「あ、いや私の場合は合ってるような合っていないような…」

もごもごと口ごもってしまった。どうしたんだろうか？

まあしかし、ここまで付き合って貰った山桜さんのお薦めだ、名前をもじってみるとすると…

うん、これでいくとしよう。

<キャラクター名入力>

<カケル>

我ながら安直だ。翔一の翔をかな読みしてかける。
だがまあ、安直ながら良い感じなんじゃないか？

「カケルですか、格好いいお名前ですね」

そういつて微笑まれると、お世辞と分かっているも照れてしまう。
照れ隠しに画面を弄り、名前の確認も完了させる。

<これでキャラクター作成は終了です>

<お疲れ様でした>

<続けてゲームの簡単な説明を行います>

<扉を開け部屋から出て、外の者の指示に従って下さい>

これでやっとキャラ作成が終わったわけか…長かったな。

「お疲れ様でした」

山桜さんの方を見やると、彼女が会釈を言った。

「私も昼休みが終わるので、そろそろおいとまさせていただきます。次の説明はとても大事ですからしっかり聞いて下さいね？」

「あ、その、色々と教えて貰ってありがとうございます！」

あわててこちらでも会釈すると、彼女は笑って手を振った。

「それではThe possible worldをお楽しみください。この世界はただのゲームですが、きっとあなたにとって忘れられない世界になる事でしょう。それだけの価値があると自負しますから」

ではまた会いましょう、といって彼女は光に包まれ消えていった。おそらくログアウトしたのだろう。

初っぱなから色々と大変だが、しかしやる気はまったく減っていない。

「それどころか、どんどん溢れてきてる」

ほんの少しとはいえゲームの情報を聞いた。たったそれだけなのにワクワクしてくる。

「こんな気持ち、随分と忘れてたな」

何時以来だろう。きっと中学のあの時以来だ。

山桜さんが最後に言った言葉が頭に響く。

あれは本当だろうか。さすがにただの宣伝だろう。けれども、

「本当であればいい。あれだけ自信満々だったんだ、期待させてもらっぜ？」

誰に言つでもなく言葉を口に出し、俺は部屋の扉をゆっくりと開けていった。

4話

扉を抜けた先は廊下のようにだった。

左右を見ると、左は行き止まり、右には廊下が続き、扉が等間隔で並んでいる。そして突き当たりには

「階段：か」

どうするべきなのか、と考えていると、階段の方から声が聞こえてきた。

「おい、そこのお前！もうすぐ訓練が始まるぞ。さっさと上がってこい！」

訓練？という事だろうか：少し思いにふけり、答えを得る。

これはおそらくだが、もうゲームが始まっているのだろう。

確かゲームは冒険者が大陸に着くところから始まったはずだ。つまり訓練とは大陸に着く前のゲーム説明のことなのだろう。

「さてさて、どんな訓練が待っているのかね」

顔に笑みを浮かべながら、足を声がした方へと進めていく。

階段を上り、目の前にあった少し変わった扉を開ける。

まず目に入ったのは青い色。そして特徴的な匂い。

「海…だって？」

そして気付く。今自分が出てきたところが船の甲板だったという事に。

「おかしい…揺れなんて感じなかったし、今も感じないぞ？」

「それはだな、揺れると訓練の邪魔だからだ」

振り向くと、先程の声の主がいた。

筋骨隆々とはこういう人の事をいうのだろう。がっしりとした体つきがタンクトップと短パン越しにでもよく分かる。

太い眉と鋭い目は威圧感を感じさせ、俺よりも頭1つ大きい身体も相まって結構怖い。

「良く来たな、新たな冒険者よ。名前はカケルであっているな？」

ニヤリ、としか言い様のない顔つきで笑う男。うん、かなり怖い。

「おい！あっているのか！？」

「は、はい！あつてます！」

よしよし、と満足そうな顔つきで頷くと、こっちへ来いと手招きされる。

逆らうのはまずいと本能が感じ、男について行くと、さっきまで気付かなかったが数人の人影があった。

人ではあるが、人間ではなかった。

おそらく獣人だろう人が2人、あとは妖精人が1人に小人が1人。

「つて小人？」

そう、小さな身体にとがった耳は、先程山桜さんに見せて貰った小人の姿に似ていた。勿論各部が違うがそれは微々たる差でしかな

い。

なる人はまれだと聞いていたが、こんなに早く見る事ができるとは。

銀髪の髪をポニーテールでまとめ、凜とした顔立ちと力強い目つきは綺麗な前に格好いいと言いたくなる。最も、身長はかなり小さいわけだが。体つきからは男か女か判別はできない。

「何よ、人の事じろじろ見て。そんなに珍しい？」

どうやらマジマジと見てしまっていたらしい。小人の人からジト目で見られてしまった。

急いで手を振り何でもないとアピール。

しかし、声からすると女性だろうか。ソプラノの良く通る声だ。いや、もしかしたら声変わりしてない中学生かも。この身長は大体それぐらいの歳だろう。

更に小人が何か言おうとした時、さっきの男が声を発したのでそちらを向く。

助かった。

「さて、今回はお前達5人が同じタイミングでキャラメイクを終えたので、一緒に訓練させて貰う。俺はインストラクターの鬼灯だ、よろしくな」

右手を握り、親指を立ててのサムズアップ。はっきり言って見るのは初めてに近いポーズだ。

他の人達も何も言わずに鬼灯の方を見ているだけだ。気まずい。うおっほん、と大きく咳払いをし、鬼灯は話し始めた。

「これから、お前達に大陸を開拓する上で必要な事を教えてやる。向こうでのたれ死にしたくなかったらしっかりと聞いておけ。更に

今回は少しなら質問にも答えてやれるぞ」

「今回はってどういう事ですか？」

あの外見に全く怯えず小人が質問する。

いやまあ話し方はそんなに怖くなかったけど、あの外見だからなあ……

「いい質問だ。まあ気付いてると思うが、俺はNPCじゃない。所謂GMってやつだな。ふつう訓練はNPCが個々人に行うんだが、たまにGMが行う時があつてな。それが今回つてわけだ。運が良いぞお前達！」

がはは、と豪快に笑う鬼灯。しかしGMだったのか。そりやそうか、NPCにしては動きが細かいと思つたんだ。…他のゲームのNPCがどんなもんか知らないが。

小人も納得したのか、分かりましたといって下がった。他の人達もGMが教えてくれると分かつてテンションが上がっているようだ。では始めるぞ、と鬼灯が説明を始める。

「まず分かつてると思うが、お前達冒険者の目的はこの船が向かつている大陸、セントレイル大陸の開拓だ。しかし、あの大陸はまだ未開の土地ばかりであり、開拓された場所も完全に安全とはいえない。野生の獣たちが襲いかかつてくる事もあるし、森はお前達が思っている以上に迷いやすい天然のダンジョンだ。そしてお前達が見た事もないモンスター、亜人もや食人植物など危険が溢れかえっている。だから！ここで最低限、身を守るための方法をお前達に教えておく」

彼はゲームの事とは思えない程真剣に話し始めた。

彼の放つ威圧感と雰囲気、自然と皆話を真面目に聞き始める。

なるほど、ゲームの説明をここまで真面目に聞かせられるんだから、この人はきつと説明がとても上手いに違いない。

俺も他の人達同様、説明に聞き入る事にした。

皆の雰囲気を感じとったか、鬼灯は、いや、鬼灯さんはまたニヤリと笑った。

「まあ、そこまで堅くなるな。しかし、真面目に聞いておけ。そうすればきつとお前達はこの世界を楽しむ事ができる。俺の同僚がよく言っているが、お前達にとって忘れられない世界になるさ、ここはな」

さっき同じ言葉を聞いた気がする。なるほど、山桜さんもGMだし鬼灯さんと同僚なのだろう。

「さて、さっきもいったがこの世界は危険が山程ある。それに対してお前達は素人だ。中には素人じゃない奴もいるかもしれないが、基本的に素人だろう。そんな素人がこの世界で生きていくにはどうすればいいかだが、1番大事な事はこれだ」

一息ためを作って彼は言う。

「頑張れ」

揺れないはずの船が揺れた気がした。

周りを見ると誰も彼もが呆れたような顔をしている。曰く、何言っただこいつ、と。

その様子を見ても彼は全く動揺せず話を続ける。

「お前ら全員、何言っただこいつでも言いたげだな。そう思うのはよく分かる。今のは心構えの問題だが…この世界を楽しむ上で

一番大事なことだ。覚えとけよ」

頑張れ、か。

そんなものは何にだって言える事だ。どんなゲームだってそうだし、現実が一番頑張らなきゃいけない。そんな、何処にでもある言葉が頑張れ、だ。

ふと、隣の小人が何か言った気がしたが、横を見ても特に何もなさそうだった。

「とはいえ、頑張れだけじゃ物足りないだろうからな。ここは1つこの世界のやり方を見せてやろう。おい、そこのお前！」

「俺、ですか？」

「そうだ、お前だ。ちょっとこっちに來い」

いきなりの指名に困惑しつつ前へ出る。

次の瞬間、俺の目と鼻の先に鬼灯さんの拳があった。

「……っ？」

何もできず、拳が目の前に来てからやっと動こうとする。拳のせいかは分からないが、顔にかすかな風が当たっていた。

早い。見る事はできても動く事はできなかった。

想定してなかったせいもあるだろう、だが、仮に来るのが分かっていたとしても反応出来るだろうか。

あいにくと俺は素手での喧嘩なんてした事がない。いきなり殴りかかれても、どうすればいいか全く分からない。

「つとまあ、今のお前達だところなる。いや、喧嘩なれしてる奴はもうチョイと動くな？普通に生活したら今のパンチには棒立ちになるしかないわな」

「はあ…そうですか」

フォローされてるんだろが、後ろの人達の視線が怖い。
恥ずかしくて振り向けないぞ、畜生。

「普通に生活してたら、今のパンチに出会う事はそう無い。だが、ここではそうじゃない。野生の獣は今ぐらいの攻撃なら普通にしてくる。それじゃあお前はどうすればいいのか、おとなしくやられるしかないのか。そんな不可能を可能にする方法がこの世界には存在する」

「それは…?」

いや、分かってるんだが、聞かなきゃいけないような雰囲気が出てしまっただな。

鬼灯さんは待ってましたとばかりに破顔し、答える。

「それがスキルのインストールだ!」

スキルのインストール。このゲームが今、世界中で人気である理由の最たるもの。脳内インストール型スキル制。

この部分だけはホームページでもしっかりと読んだ。

この世界で言うスキルとは現実での技能の事だ。技能とは歩くといった基礎的なものから、スポーツといった複雑なもの、とにかく無数に存在する。

今の世界はこの技能を技能データとして脳内から抽出し、別の人間の脳内にインストールする事でその技能を移し替える事ができる。よって高ランク、質の高い技能データは莫大な値段がつく。

低ランクの技能は高ランクに比べれば、頑張れば手が届く値段で取引されているが、そんなものを買っても大して旨みがないので、脳内インストールを経験した事がある人間は珍しい部類に入るだろう。

「さあ、こいつをくれてやる。早速やってみる！」

そういつて鬼灯は右手の黒い、手枷のようなDデバイスを起動し操作する。

すると俺のDデバイスにデータが送られてきた。
右手を振り画面を開く。

<鬼灯からデータを受信しました>

<スキルデータ『避け』：ランク1が存在します>

<インストールしますか？>

<Yes/No>

技能のインストール…いつか絶対にしてやると誓った。その為に
バイト漬けの青春を過ごした。それが、

今日の前にある。

ランク1、大したものじゃない、だが…

<『避け』：ランク1をインストールします>

風鈴の音が、聞こえた。

視界が、暗くなつた、気がした。

…何かあったか？

「おう、目が覚めたな」

目の前には、さつきと変わらず鬼灯さんの姿がある。
何も変わってない？

「あの、今一瞬目の前が…」

「ああ、お前は今5分間眠っていたからな」

「眠っていた…?」

そうだ、と鬼灯はうなずき。

「スキルデータをインストールする際、ランク×5分間眠る事になる。寝ている間にスキルをインストールするわけだ。だからほら、後ろを見てみる」

言われて振り返ると、そこには立ったまま目を閉じている他の4人の姿があった。

いや、なんて言うか、凄い無気味だ。

あ、しかし小人の寝顔は凄い可愛いな。さっきまで強気な感じの顔だったからギャップらしきものが。立ったままでなければ、尚良かったんだが。

つと、あんまり寝顔を見るのは良くないな。

「しかし、そうならそうと言って欲しかったんですが」

「いや、言わない方が面白いかと思ってな。実際ビックリしただらう?」

その言葉と同時に、鬼灯さんが右の拳を放つ。

見える、と同時に今度は身体が動いた。自然に左足で地面を蹴って右へ。

拳は俺の顔のすぐ横を、風圧を感じさせながら通り過ぎていく。

「って寸止めじゃないんですか!?!」

「いや、避けられるはずだから良いかと思っただけ」

「そりゃ避けられましたけど!?!…って、え?」

避けた。今自分は確かに避けた。

それだけじゃない、どう良ければいいかが頭の中にあり、俺の身体がそれをしっかりと再現していた。ごく自然に。

「これが…スキルのインストール？」

「そうだ。そして、それこそがこの世界を生きていく際に活用出来る、便利な道具ってわけだ」

何度目か分からないニヤリ顔に、更に自慢げな顔を足して鬼灯さんは笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9151z/>

The possible world

2011年12月30日22時46分発行